



1849年、現在の宮崎県出身の医師。当時、国民病とされ死亡する人も多かった脚気の原因を突き止め、それが後にビタミンの発見につながるなど、医学界の進歩に大きな貢献をした。

### ▶▶▶ イギリス留学で学んだ医師としての姿勢

海軍省の軍医として勤めて3年後、26歳でイギリスに渡ると病院附属の医学校で学び始めた。留学中の5年間で数々の名誉ある賞を受け、首席で卒業するほど熱心に医学を学んだが、最も大きな影響を受けたのは医師としての姿勢だったのではないかと。研究のための医学をメインとしていたドイツの医学に対し、イギリスの医学では目の前の患者を救うことに主眼を置き、医師や看護師の人材育成にも力を入れていた。兼寛は「病気を診ずして病人を診よ」の言葉を残しているが、イギリス医学と通じるものである。

その精神の顕著な例が脚気の疫学調査である。当時、海軍では乗組員に脚気が続出していた。31歳で帰国後、軍医を務めていた兼寛はさまざまな調査やイギリスでの経験から、原因は炭水化物の過剰摂取とタンパク質不足という食事にあるのではないかと仮説を立てた。2隻の軍艦の乗組員を対象にバランスを改善した食事と従来の食事とで調査すると、改善食を食べた乗組員には脚気が起きなかった。仮説は実証されたのである。

脚気の疫学調査と並行し、兼寛はイギリスで見たような病院と医師や看護師を育てる医学校をつくりたいと動いていた。志を同じくする者と共に民間医学団体を立ち上げ、帰国からわずか2年後にその夢を実現している。

晩年は全国の学校を中心に、保健衛生について説いて回る一方、漢詩や和歌、書をたしなんだ。プライベートでは23歳で結婚し5人の子どもがいたが、72歳で亡くなる時には長男しか残っていなかった。だが、「病気を診ずして病人を診よ」という彼の精神は、多くの医師や看護師たちに受け継がれているだろう。

(執筆/ライター 篠田 りょうこ)

12歳 地元医師の姿に憧れ医学の道を志す  
20歳 鹿児島島の医学校に入学  
26歳 イギリスの医学校に留学  
33歳 脚気の疫学調査を実施

vol. 18

# 高木 兼寛

▶▶ Takaki Kanehiro

## 脚気の原因を追究し、 人材育成にも尽力

1960年代頃までは健康診断で必須だったという脚気の検査。ゴム製のハンマーで膝頭の下あたりをポンと叩いて、足が上げれば正常、上がらなければ異常が疑われる。今ではほとんど耳にすることもなくなった脚気だが、死者の多い国民病として恐れられていた時代があった。神経障害でしびれや全身倦怠が出て、悪化すれば心不全などで死に至っていたからだ。医学の権威が感染症説を唱える中、揺るがぬ信念で疫学調査を行い食事に原因があることを突き止め、多くの命を救った医師がいた。

### ▶▶▶ 地元の医師の姿に憧れ、医学の道へ

長く続いた江戸時代も終わりを告げようとしていた1849年、高木兼寛は現在の宮崎県にある村で武士の家に生まれた。武士とはいえ下級武士であった父は、生活のため大工仕事も請け負っていた。一人っ子だった兼寛は跡を継ぐべく父の仕事を手伝っていたが、虚弱な息子の将来を案じていた両親は学問に励むよう勧めた。7歳になると塾に入り『四書五経』を学び始め、剣術を習うようになると次第に体も丈夫になっていく。

医学の道を志したのは、地域の人たちに敬愛されていた医師の姿から。貧富の分けへだてなく病气やケガで苦しむ人々を救う医師の尊さに、憧れを抱いた。だが、父が護衛として京都へ行ったり、病になったことで、兼寛は家計のために働かなければならなかった。

ようやく医学の道を歩めるようになったのは17歳の時、まずは蘭方医の下で学んだ。20歳になると鹿児島島の医学校に入学し、西洋医学を学びながらイギリス人医師の助手としても働いた。その働きぶりと優秀さを認められた兼寛は、恩師らによりイギリスの医学校への留学を後押しされる。